

親子で体験 夢づくり・ものづくり

- 「親子で野鳥観察と巣箱づくり」 -

林 哲三^{*}，川久保守^{**}，近藤達也^{**}，丸本理恵子^{**}



目 次

1. 大学等地域開放特別事業(大学子どもプラン)について
 - 1 大学等地域開放特別事業の要旨
 - 2 本学での過去の実施状況
 - 3 平成13年度事業の概要
 - 4 広報活動
 - 5 参加者の内訳
 - 6 事業担当者の内訳
2. 講座の内容
3. 事業を終えての感想
 - 1 参加者の感想
 - 2 企画・実施担当者の感想
 - 3 サポーターとして参加した学生の感想
4. 講座の成果と意義
5. 子どもたちに向けた大学開放事業と高岡短期大学

^{*}産業造形学科，^{**}事業課

1. 大学等地域開放特別事業 (大学子どもプラン)について

1.1 大学等地域開放特別事業の要旨

大学等地域開放特別事業(大学子どもプラン)は、平成14年度の完全学校週5日制の実施に向け、文部科学省が、平成11年度から3年がかりで取り組む「地域で子どもを育てよう緊急3ヶ年戦略(全国子どもプラン)」の1つとして全国的に実施する事業で、国立大学などの教育施設を学校休業土曜日、日曜日、夏休みなどに地域に開放し、子どもたちが多彩な活動を体験できる機会を提供するものです。

各機関が子どもたちとその保護者を対象にそれぞれの施設を利用した開放プログラムを策定し、文部科学省が採択したものに対しては予算配分がなされることとなっています。

この事業の背景には、近年、子どもの「生きる力」をはぐくむ上での、子どもたちの生活体験・自然体験の不足が指摘されていることがあり、中央教育審議会答申でも、異年齢集団活動など、子どもたちに豊かで多彩な体験活動の機会を与え、心豊かに育てていく環境を整備するようにとの提言がなされていることがあります。

なお、事業計画策定にあたっては次の点が義務づけられます。

子どもたちが日常では体験できない生活体験や自然体験の機会を提供するものであること

対象者は、主として小・中学生(保護者を含む)であること

実施場所は、大学施設であること
また、予算措置は、下記のとおりです。

1.2 本学での過去の実施状況

本学では、「親子で体験夢づくり・ものづくり」をメインテーマとして、初回にあたる平成11年度から実施しています。

(平成11年度)

「パソコンを使ったオリジナルグッズ作成教室」

実施日：平成11年10月31日(日)

産業情報学科(現地域ビジネス学科)教員を中心にコンピュータ等のマルチメディアを活用してのTシャツ、カレンダー、名刺などのオリジナルグッズ作りを実施しました。創己祭(大学祭)当日に100名の募集人員で実施しましたが、参加者は当日の申込者も含め157名でした。

参加者 157名

(小学生 82名, 中学生 11名,

保護者 64名)

担当教官 6名

学生補助 15名

(平成12年度)

「蠟型鋳造でオリジナルグッズ制作」

実施日：平成12年7月28日(金), 29日(土),

8月4日(金), 5日(土)

産業造形学科の教員により、蜜蜂の巣から採取した蜜蝋と松や二を煮合わせた蠟での原型造り、その原型を土で包み込む蠟型造り、煉瓦と練り土などでの窯作りからその窯での鋳型の焼入れ、鋳(スズ)と銅を溶かしての合金造りとその合金の鋳型への流し込みといった本格的な鋳造を実施しました。

参加者 32名

(小学生 20名, 中学生 2名,

保護者 10名)

担当教官 3名

学生補助 15名

1.3 平成13年度事業の概要

「親子で野鳥観察と巣箱づくり」

実施日：平成13年8月3日(金), 4日(土),

5日(日)

年度	予算額(千円)	採択機関数	採択事業数
11	32,600	76	97
12	65,021	127	169
13	65,021	136	186

日本野鳥の会富山支部から講師を招き、クイズなどを交えた野鳥観察を実施した後、産業造形学科の教員により、木の特性や工具の使い方の説明を行い、杉の板、ツタ、小枝等を使っの巣箱づくりを実施しました。

1.4 広報活動

- ・高岡市広報「市民と市政」に掲載（7月1日付）
- ・高岡市内の各小学校（10校）にリーフレットを持参
- ・高岡市記者室を通じて報道機関に広報依頼

1.5 参加者の内訳

- ・参加者 37名

・形態別

年 度		子ども	保護者
子どものみ参加（友達同士）	1組	3	
両親と参加	1組	2	2
母親と参加	7組	8	7
父親及び祖父と参加	1組	1	2
父親と参加	5組	5	5
祖父と参加	1組	1	1
計	16組	20	17

・男女別

		子ども	保護者
男	24	15	9
女	13	5	8
計	37	20	17

・学年別

小学3年生	1
小学5年生	12
小学6年生	7
計	20

・地域別

高岡市	34
富山市	3
計	37

・本事業を知った方法

高岡市広報	1組
小学校からの案内	14組
本学関係者	1組
計	16組

1.6 事業担当者の内訳

氏 名	所属官職又は職名	担 当
水島 和夫	副学長（開放センター長）	総括
倉田 久敬	産業造形学科教授	企画・実施担当者
谷口 義人	産業造形学科教授	企画・実施担当者
林 哲三	産業造形学科教授	企画・実施担当者
丸谷 芳正	産業造形学科助教授	企画・実施担当者
小松 研治	産業造形学科助教授	企画・実施担当者
内藤 裕孝	産業造形学科助手	企画・実施担当者
高畑 晃	日本野鳥の会富山県支部	野鳥観察の講師
川久保 守	事業課長	広報責任者、実施担当者
近藤 達也	企画調査係長	実施担当者
丸本理恵子	企画調査係員	実施担当者

	8月4日	8月5日
本学学生補助者（専攻科学生）	5	5

2. 講座の内容

第一日目（8月3日・金）

（1）概要説明

- ・開講の挨拶、講師・受講者の紹介の後、野鳥の観察、木材の性質、木材の利用、木工道具の使い方、巣箱のデザインや作り方など講座全体のスケジュールを説明する。



(2)野鳥の観察

- ・日本野鳥の会富山支部会員の高畑見講師と一緒に屋外へ出て野鳥の観察を行う。始めに校内の敷地でカラスやスズメなど双眼鏡を使って種類を見分ける。



- ・校内の用水路でカモ, サギなど水辺の鳥の特徴を講師の説明を聞きながら観察する。



- ・二上青少年の家周辺の森の中で観察する。しかし、夏の日中鳥は木陰に隠れて姿は余り見られず、鳴き声で種類を聞き分ける。



- ・散策しながら野鳥の生活, 鳥の渡りなど講師の説明とクイズで勉強する。



第二日目(8月4日・土)

(1)木材の性質について

- ・針葉樹・広葉樹の種類, 細胞の顕微鏡観察, 木材各部の名称, 乾燥による収縮などの話をスライドを見ながら聞く。



(2)木材の利用について

- ・木材を使って製作された実物を見ながら, 作られた目的, 機能, 製作工程, 使い方などの話を聞く。



(3) 巣箱のデザインについて

- ・野鳥の性質・生活など考えて、鳥が好む巣箱の特徴、形や大きさ、入り口の形などについて、実際の巣箱の見本を見ながらデザインの方法を聞く。



(4) 工具類の使い方

- ・木材を加工するためにまず、寸法を計るサシガネ、木を切るノコギリ、穴を穿つキリ、釘を打つカナヅチなどの使い方を、講師・学生の指導を得て実習する。



(5) 巣箱のアイデアとデザイン

- ・各グループで製作する巣箱のデザインを画用紙にスケッチする。



第三日目（8月5日・日）

(1) 巣箱の部材加工

- ・巣箱寸法の決定、スギ材の木取り・切断、屋根や枠等の製作を学生の手助けで行う。



(2)部材の組み立て

- ・出来あがった各部材にキリやハンドドリルを使って穴をあけ、釘を打って組み立てる。



- ・巣箱の屋根や外回りに木の皮が付いた板や蔓を巻きつける。



(3)仕上げ

- ・止まり木を取り付けたり絵の具で色を着け、ヤスリで角を丸めて完成する。



(4)作品発表

- ・各グループ毎に完成した作品のポイントの説明や、講座の楽しかった事など感想を述べ、一堂に陳列した作品を皆で鑑賞する。



(6)記念撮影

- ・各グループ毎に作品を手に屋外の木陰で記念写真を撮る。



(5)修了証書授与

- ・受講者一人一人に倉田講師から講座の修了証を渡す。

3. 事業を終えての感想

3.1 参加者の感想(原文のまま)

- ・最初は、ぜんぜん切り方、くぎのうち方も知りませんでした。でも、学生さんや先生方にくわしくおしえてもらって自分のまんぞくの巣箱ができました。みなさんありがとうございました。

(小学5年生・女子)

- ・はじめてこういうことをしているいろいろな鳥の名前や、すばこ作りをして、とてもよいことを学びました。とても楽しかったし、すごくいい思い出になりました。

(小学5年生・女子)



- ・大きなすばこができました。よくそだつとりが、きてほしいです。

(小学5年生・男子)

- ・ひさびさにお父さんと工作がくれたのでうれしかったです。

(小学5年生・男子)



- ・くぎを打つ前には、いつもきりで手が痛くなって「ハアハア」と息をかけていました。自分は、最初板を組み合わせてシンプルな感じの巣にしようと思ったけど、鳥が入って来てほしいので丸たを並べたりして工夫しました。

(小学6年生・男子)

- ・夏休みの宿題ができればいいくらいの気持ちで参加したのですが、バードウォッチングの先生の興味深いお話や、木材を扱う先生方の技にすっかり引き込まれて、本当に鳥が来てくれるといいなと心から願って一生懸命作品に取り組んでいました。本当に有り難うございました。

(保護者)

- ・親子で一つのことを一緒にする時間は、日頃の生活ではあまりなく、本当に、良い体験をさせていただきました。私の意見と子供の意見が違ったり、けんかになったりもしましたが、親の意見を押しつけるのではなく、子供の主張を受け止めてやれる親になれる努力をしなくてはいけないのだと、作品を作りながら感じさせられました。

(保護者)

- ・デザインから考えて、材料も自分たちで切ったり、かなづちでくぎを打ったりして、初めてのことばかりで、初めは不安でしたけど、作っていくうちに、いろいろなアイディアとかでできた



り、形ができてきてうれしかったりして、楽しく作ることができました。

(保護者)

- ・PTA活動でも、毎年数回親子活動を実施しておりますが、なかなか時間の関係でこれ程大がかりなものではありません。今後、小学校での開催にこぎつければと考えておりますので、機会がありましたら、ぜひご指導の程宜しく願いいたします。(保護者)

3.2 企画・実施担当者の感想

「親子でものづくり」参加して

倉田 久敬

8月第1週の金曜日から日曜に掛けて、私たち木材工芸コースでは「野鳥観察と巣箱作り」というテーマで「親子でものづくり」の教室を開きました。最近は小学生の遊びと言えば人工的な物ばかりで、木材のように一見汚いようなイメージの物を扱ってくれるだろうかと心配がありました。しかし、実際は皆嬉々として木材に取り組んでくれて、こちらが驚くほどでした。

昨今の地球環境に対する過剰意識から、木材を使うのは環境破壊につながるという短絡的な考え方が増えています。この教室で、私は、木材の性質についてお話しをすると共に、森からの贈り物である木材を適切に使う事は地球環境の為に好ましいという事をお伝えしたつもりです。

ところで、巣箱に小鳥が棲みついたのでしょうか？

「親子で体験ー夢づくり、ものづくり」

谷口 義人

開放事業のひとつとして、本年8月に親子で体験する巣箱づくりを企画しました。初日、日本野鳥の会の高畑さんの案内で野鳥観察を行い、子供達や父母と一緒に私も撮影係として参加しました。コサギ、カルガモ、ツバメ

等平素は気づかない鳥が二上山周辺に生息していることを確認しました。

私は平成7年5月に中部イタリアのスポレートという小さな町に泊りました。翌朝街の様子を眺めようと、窓の木戸を押し開きますと、まだ薄暗いなかツバメがぶつかるとはなれないかと思ふくらい、群れをなして飛び廻る眩目すべき光景を眼にしました。自然環境が良好に保たれている証しですね。

現代人は、利便性や経済の効率を優先に考え、高度成長という命題のもとに乱開発を行い、都市文明を謳歌する大量生産・大量消費型のものづくりを目指してきました。共存・共生・環境保全を指向するいま反省を余儀なくされています。

今回、次世代を担う子供達が、野鳥観察や巣箱づくりに取り組む嬉々とした姿を見て、この企画を実践して良かったと再確認しています。

「自然からの情報」

丸谷 芳正

「親子でものづくり」ではおもに制作環境の準備と制作技術指導を担当しました。実は、計画が終わり実際に作業がスタートすると、指導する必要はほとんどなかったのです。このことは指導者がさぼっていたのではなく、素材や作業自体が本人達に教えていたのではないかと思います。作業場全体の雰囲気はとても活気があり、金槌で釘をたたく音、鋸を挽く音、失敗して叫ぶ声など物と戯れているといった感じでした。もちろん釘の打ち方が悪く木を割ってしまったり、長さを間違えて切ってしまったりするのですが、それはそれで次の解決策を講じることで計画とは違った形になったりするのです。これが見ているととてもおもしろい。子供の奔放さと親の社会人として制御された心とがうまくミックスしたことで今回の企画は成功したのかもしれない。自然や自然素材と接する事、自然素材を利用してものをつくること、自ら体を動か

して考える事で得る情報は人間が発達する情報の質と違う次元にあるように思われます。

今後このような企画を続けるべきでしょう。

「子供の即興的モノ作りを見て」

小松 研治

子供達の制作過程は、驚くほど即興的であった。スケッチブックの中には、一応の設計図が描かれてはいたが、それにはあまり捕らわれず、どんどん切ってどんどん組み立てていく。大人がよくするように、寸法をよく測り、材料を吟味して正確に加工するリズムとは明らかに何かが違う。目の前に出来つつある作品に対して、無邪気で気まぐれな思いつきを躊躇なく実行していくように見える。時には戸惑いもみられたが、そのことが作業を中断させるほど深刻ではない様子だ。

その一方で、雨が漏らないように屋根を張り、鳥が遊ぶことが出来るようにプランコを作り、巣に入りやすく階段を作る。その色だけは塗らないで欲しいと私が思う色を、何とも大胆に塗っていく。何の鳥かは知らないが、そこに来る鳥の動きをはっきりとイメージしているように見えた。

今回このようなモノ作りの現場に立ち会い、素材と対話して願いをもって制作する姿がとても羨ましく思われた。

「親子でものづくり」 内藤 裕孝

一つのことをやり遂げた時の自信に満ちた面もち、そして笑顔。参加してくれた子供達みんな三日前よりいい顔してる。お父さんお母さんも嬉しそうだ。巣箱づくりを振り返ってみると、これが一番の成果であったと思う。暑い中、汗をかきながらの制作。思うように木が切れなかったり、寸法を間違えたりと。それでも親子で友達同士で助け合い一歩ずつ前に進む、思い描いた巣箱を完成させるために。いつしか暑さも忘れ、皆真剣そのものの制

作に取り組む。三角屋根のロッジ風、窓のたくさんある現代マンション風など個性も抜群、とても同じ材料からできたとは思えない。いやはや小学生といえども侮れぬ。さあ出来たぞ僕のわたしの自慢の作品、笑顔とともに記念撮影。

参加者の皆さん楽しんでいただけたでしょうか。三日間と短い時間ではありましたが、皆さんのすばらしい作品と笑顔に出会えたことに感謝いたします。ものづくりを通して、親と子また友人同士のふれ合いの一時であったのなら幸いです。またどうぞ短大に気兼ねなく遊びに来て下さい。

「担当スタッフとして参加して」

丸本 理恵子

実施担当者として広報等に携わり、子供達の視点でリーフレット作成を試みるなど、事前に相手の立場に立って物事を考えることの大切さ、難しさを痛感しました。

夏休み中の3日間ということで、この炎天下に野鳥が大学周辺や二上山にいてくれるだろうか？ 暑さで、体調を崩される方はいないだろうか？ ケガをされる方はいないだろうか？ このようなことばかり考えていたが、参加者のみなさんが、すべてを吹き飛ばしてくださいました。

また、初日の野鳥観察や2日目の木の性質・鳥が好む巣箱の特徴など講師の説明に真剣に聞き入る子供達の姿や、巣箱づくりで使う道具の実演指導での興味津々輝く目つきで見入っている姿を見て、熱いものがこみ上げてくる自分を発見でき、いつ・どんなときでも、人が真剣に物事に向き合う姿勢は、人に感動を与える！ という普段私が忘れていたものを思い起こさせてくれました。

私にとって実施担当者の一員として参加できたことは、とても有意義でした。感謝します。

暑さの中、いっしょうけんめい取り組んで

くださった皆さんには、木のぬくもりやものづくりの楽しさ、共同作業の大切さを身近に感じてもらい、親子のコミュニケーション、また高岡短期大学を知ってもらおう好機となって気軽に足を運んでもらうきっかけになったと思います。

3.3 サポーターとして参加した学生の感想 専攻科 産業造形専攻2年生 近堂 美聡

はじめのスケッチで出てくるものは「鳥の巣箱」らしい絵なのだが、作っていくうちに「こうしよう、ああしよう」と形が、個性的に変わっていくのが、おもしろく楽しかった。

「鳥はきっと喜びに違いない」と、とまり木やブランコなどアイデアが出て巣箱がどんどん豪華になっていく。

大型加工機械を全く使わずに、お父さん・お母さんと協力して工具を使って作り上げていく、普段きつと経験できないことが出来たのではないかと思います。



専攻科 産業造形専攻1年生 野原 一浩

とても楽しく、良い経験になりました。特に、どうしたら分かり易く相手に教えられるのかを考える事は、大変であったと共に良い経験でもありました。

又、子供ならではの想像性豊かなアイデアは、非常に楽しく柔軟性に富んでいる事に驚きました。



専攻科 産業造形専攻1年生 犀籐 正美

子供達と一緒に鳥の巣箱をつくるということで、初めは何を教えてあげたらいいのかという気持ちだった。

しかし、つくり始めると、子供達の方が「こんなのをつくりたい」とか「ここをこうしたい」などと言ってきてくれ、できるだけ期待に応えてあげたいと思った。

自分はものをつくる時デザインの段階で、構造や作り方を同時に考えてしまい、形が単純で制限されたものになってしまう。しかし、子供は自分が思う形を素直に出し、思いもよらなかったようなおもしろいものを生み出す。それにどこまで自分が応えてあげられるか難しかった。

今回の体験を通して子供の発想のおもしろさと、教えるという大変さを自分自身学ぶことができた。



専攻科 産業造形専攻1年生 柳原 裕子

鳥の巣箱づくりということで、軽い気持ちで参加したのですが、本当に色々とい経験になりました。まず子供達のパワーに圧倒さ

れ、そして人にもものを教えることの難しさを痛感した2日間でした。

何でもすらすらとやってしまう子もいれば、釘1本打つのに悪戦苦闘という子もいて、どうやって教えたらいいのかわからずてんてこまいでした。

でも「こんなのがいい」「あんなのがいい」と私には思いもつかないような発想がたくさん出てきて、一緒になってやっていると、とても楽しかったです。普段は強度とか組み手とか難しいことを考えて作品を作っていますが、多少ゆがんでいようが釘がとびだしていようが、物をつくることの楽しさをあらためて教えてもらった気がします。



専攻科 産業造形専攻1年生 奥野 健人

今回「親子でものづくり」にサポーターとして参加し、とても良い経験になりました。子供達の自由な発想はとても新鮮でしたし、教えることの難しさを知ることができました。そしてなにより親子の方々に楽しんでもらえたものづくりを手伝えたことが一番良かったです。



4. 講座の成果と意義

この事業を木材工芸コースが担当するという事に決まってから、私たちスタッフは「親子で一緒にものづくり」や「自然の体験」ができないかというテーマで検討し、「野鳥の観察と巣箱づくり」という内容になりました。そして、親子で参加しやすく、夏休みの土日を含んでいる8月3日(金)・4日(土)・5日(日)の3日間に設定して計画を進めました。

野鳥の観察は専門の立場から話していただくということで、日本野鳥の会富山支部の高畑晃氏に講師を依頼することとなりました。そして木材の性質、利用、巣箱の作り方、木工工具の使い方などの講義・実習で内容の充実を図りました。

1日目の野鳥の観察では、初めに高畑講師から鳥の羽根の特徴や擬似鳴き声装置を使って鳥の種類などの話を聞いたあと、双眼鏡を手にも外へ出て散策しました。校内の用水路ではカモ、シラサギなどを発見し、このような所にも水辺の鳥が生息していることを知りました。また、二上山周辺では目にする鳥の解説を聞きながら観察しましたが、夏の日中ほとんどの鳥たちは木陰で暑さをしのぐということでほとんど姿を見ることはできませんでした。しかし、講師から鳴き声で何という名前の鳥かを説明していただいたり、クイズ形式で鳥についてのいろいろな生活や特徴など、興味深い話を聞きふだん気がつかなかったことを改めて知りました。午後は教室にもどり、さらにスライドなどでさまざまな鳥の生態などを勉強しました。

2日目は、はじめに、倉田講師から日本の樹木の分布や種類、顕微鏡を使った木材の観察、見本の板を使った材各部分の名称や乾燥による収縮などの講義を受けました。丸谷講師からは、木材を使って製作する技術やその利用方法などを、実際の製品を参考にして話を聞き、つくる目的やデザイン、機能、製

作工程、使用方法などについて学びました。

次に、巣箱をつくる時どのような観点に注意したらよいか、鳥が好む巣箱とはどんなものか、また巣箱のデザインをする時の考え方やスケッチの方法を、実物の見本を参考に小松講師から講義を受け、これから作る巣箱の形を実物や参考書をみてグループで相談しながらスケッチをはじめました。

今回、工具としては、一般家庭にもあるノコギリ・カナヅチ・釘などの手工具と、ドリル・ドライバーの電動工具といった基本的な木工道具に限定しました。

初めに練習用の材料を配布し、サシガネを使っての寸法の計り方、次にノコギリでの材の切断、そして同じ大きさに切った材料を釘を打って枠に組み立てていく練習をしました。皆あまり木工作業の経験がないようで、初めはぎこちない様子でしたが、学生の手助けや講師の指導で親子・友達と一緒に一生懸命取り組み、工具の使い方も次第にうまくなっていきました。

午後は本番用のスギ材を配布し、基本的には一グループで一つの巣箱を作るという条件にしました。これは一人で好きに作るのではなく、親子や友達でアイデアや作業を相談し協力して一つのものを作り上げるということが、この講座の大きな目的の一つだからです。

すぐにアイデアが決まり、さっそく木取りを始めるグループがあると思えば、なかなかアイデアが決まらず、四苦八苦しているところもありました。日頃のコミュニケーションの差でしょうか、それでもしばらくすると全員材料の木取りに取りかかっていました。

その後は、学生のサポーターの役目が忙しくなり、あちらこちらのグループから声がかかり、てんてこ舞いといった感じでした。子供達と真剣に議論している様子なども見うけられ、学生もそれぞれの場面を判断しながら

教えることの難しさを知り、また「こうした方がいいんじゃないの」と反対に子供達に教えられるなど、貴重な体験をしたことだろうと思います。

3日目の実技室は作業も佳境に入り、お母さんが材料を持ち、子供がノコギリで切る様子や、ここが出番とお父さんが切ったり釘を打ったりどんどん作業を進めてしまい、子供は手持ち無沙汰の様子など、さまざま場面が展開されました。

お互いに協力したり意見の食い違いの克服などを繰り返しながら、巣箱の壁面や屋根を張ったり、さらに入り口の穴あけ、止まり木の取付け、外側への木の皮の貼り付け等、それぞれアイデアいっぱいの独創的な形の巣箱が次第にできあがっていきました。全体を白く色を塗ったものが現れたり、豪華になり過ぎて果たして鳥が入るか心配になるものも出てきました。

午後2時頃には大部分のグループが完成しましたが、やはり遅れるグループもあり、完成までまわりの人もやさしく見守り、できあがった時は皆で拍手を送りました。講評会では、それぞれの作品を前に楽しかったこと、苦労したこと、参加して得たことをいろいろ語り合いました。終わりに倉田講師より一人一人に修了証が渡され、さらに子供たちに講師の作った木製の笛がプレゼントされました。その後、外の木立の陰でグループごとに巣箱を持って記念写真を撮りました。みんな満足そうな顔が印象に残っています。

以上講座の経過を簡単に書きました。日頃身近に目にしている木材や鳥をテーマに巣箱づくりを企画しましたが、いざ実行していくと、主催者・受講者お互いに鳥のことをほとんど知らなかったり、あたり前にできと思っていた作業ができなかったりすることが多くありました。

流されていくような日々の生活の中でちょっと立ち止まってまわりを見ると、大きな環

境の変化を知ることができ、新鮮な快感やおどろきを感じることができます。そのことが参加してよかった、やって良かったと思えるのではないかと思います。

やはり大学の事業であるということで、それぞれの工程のなかで専門的立場から解説することも、今回の大切なポイントでした。子供たちにとってはすこし難しいところもあり、わかりにくかった点もあったかと思いますが、これから次の世代を担って行く子供たちとその両親に、ものづくりに対する興味や大切さ、また専門的知識が必要であることを知ってもらい、いつの日か役立ててもらえれば幸いと思います。

おわりに、当日に至るまでの広報活動、講師担当、材料の調達購入など、そして真夏の暑い日であったにも関わらず多数の人に受講していただき、楽しく有意義な成果を得たことは開放センター職員の方々、サポート役の学生、講師の先生方、関係スタッフ皆さんの誠心誠意な努力によって成し得たことと感謝申し上げます。

5. 子どもたちに向けた大学開放事業と高岡短期大学

高岡短期大学が企画した子どもたちに向けた大学開放事業は、前述のとおり国の施策の下に、今年で3回目となりました。これまでの各企画に参加いただいた子どもたちや保護者の方々から、好意的な感想が多く寄せられたことは、事業の担当者の一人として喜ばしいことです。

高岡短期大学は、「地域の多様な要請に積極的に応え、広く地域社会に対して開かれた特色ある短期大学を目指す」という建学の趣旨に則り、開学以来、大学開放事業を展開してきたところですが、平成10年度以前においては、中学生以下の生徒児童に対しての事業は、ほとんど実施されませんでした。平成11年度から実施したそれぞれのテーマによる

「ものづくり」のための体験事業は、大学が持つ教育・研究機能と施設を活用して、「地域で子どもを育てよう」というものです。この事業の主体は本学の教員ですが、サポートに加わった学生諸君の活躍が事業の成功に大きな役割を占めていたように思います。彼等は、この事業で地域の子どもたちとその保護者に関わることで、単にその手伝いをただけではなく、高岡短期大学自体の「通訳者」としての役割を果たしたように思われます。また、彼等自身にとっては、大学の授業では学べなかったことを学ぶことができたのではないのでしょうか。このことは、地域との関わりを模索する大学にとっては、期せずして、新たな教育プログラムも果たしたように思います。

最近、「地域に貢献」というフレーズが全国の大学から聞かれます。この地域貢献のためには、単なるボランティア的活動ではなく、地域と大学とのパートナーシップを形成すること。大学が教育、研究の両面で、地域に密着した学問を展開すること。地域生活の知的、社会的、文化的、経済的な質の向上に関与すること。そして、相互に交流を行い、いかにして地域のニーズに合った学問を行っていくのか。等が必要であると言われています。今後の大学再編や大学法人化により、富山県に新大学が誕生する際には、「大学では学べないことが地域で学べる、また、大学で教えることは、地域に入って初めて意味をもってくる。」というようなパートナーシッププログラムや、連携する地域パートナーとの多様なネットワークができ、皆が「地域のために」という実践教育の理解と合意が進展し、幼稚園から大学までシームレスな教育、研究体制ができることも期待したいと思っています。

この国の施策による事業は、平成13年度で終了となりますが、文部科学省においては、将来の科学技術の発展を担う生徒の理科離れ

防止や、ものづくり体験を推進する等の趣旨から、新たな施策を企画されているとも聞き及んでおります。また、本学においては、学外の学識経験者からなる運営諮問会議において、高校生以下への大学開放についての提言があったこともあり、平成14年度以降においても、こうした事業の開催を積極的に図っていくこととしています。